『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』
第 10 巻第 2 号（通巻第 29 号）（2024 年 4 月）

醸成された「現実主義」
――戦後日本における重層的人脈の生成と展開――(1)

大 山 貴 稔

粕谷　いままでの思想史も文学史も全部それ［人と人との結びつき――大山注］をカットしちゃっている。政界も財界もそうだけども、言論界も人間関係だと思う（内田・粕谷1987：178）。

Ⅰ.「現実主義」再考――人的連関という暗黙裡の前提

日本で「現実主義」的な論調が脚光を浴びるに至った契機として、粕谷一希（1930～2014年）という編集者の存在は無視しえない（根津 2008）。粕谷は中央公論社で雑誌『中央公論』などの編集に携わり、そこで高坂正堯や永井陽之助などの名立たる論客を世に送り出した後、サントリー文化財団の雑誌『アステイオン』や外務省の雑誌『外交フォーラム』などの編集にも力を注いだ人物である。かかる粕谷の足跡を振り返ると、「現実主義」的と見做されてきた論客たちの活動拠点の広がりと軌を一にしているように見える。

冒頭で引用したのは、北岡伸一『清沢洌――日米関係への洞察』（中央公論社、1987年）の対談書評で粕谷が述べた一言である。清沢が正規の学校教育をほとんど受けず、故郷や移民先アメリカ、『中央公論』の寄稿者を集めた二七会などで他者との関わりを通じて洞察を深めてゆく機微を捉えていると粕谷は同書を評価しており、「人間関係のなかに生きていくということは、普遍性を持っている」という自らの見解も対談のなかで示していた（同上）。奇しくも同書がサントリー学芸賞を受賞した際には、北岡が師と仰いでいた佐藤誠三郎が選評を著したのであった(2)。

（1）本稿は JSPS 科研費 22K01355 の助成を受けたものである。

（2）佐藤誠三郎のもとで学んだ御厨貴（2018：199-200）によれば、佐藤が「実に誠心誠意この選考委

さて、日本でも「現実主義」の再解釈が進められるようになって久しい。日本の「現実主義」は英語圏のリアリズムを援用した亜流に過ぎないという見方から離れて、日本語の文脈で涵養された「現実主義」的な思想連関を捉えるような研究が続いてきた（酒井 1996；村田 2008など）。パワーなどの中核的概念に焦点を当てたり（神谷 2012a；神谷 2012b；春名 2020など）、高坂をはじめとする主導的論客を俎上に載せたり（五百旗頭・中西編 2016；服部2018 など）、さらには日本の「現実主義」を中国のそれと比較したりする研究が積み重ねられている（張 2020）。

だが、「現実主義」という言葉で括られたものは思想連関だけではなさそうである。というのも、これまでの研究では日本政府の対外政策に示唆や影響を与えた知識人に多大なる関心を寄せてきた一方で、フランケル『国益』やバーリン『ハリネズミと狐』といったリアリズム的な著作群を訳した河合秀和などは見過ごしてきたという不規則さが見られるからである。こうした関心の濃淡を踏まえると、「現実主義」には日本政府の対外政策を取り巻く人的連関という一面が暗黙裡に内包されており、先行研究の多くはその枠のなかで生み出された思想連関に光を当てた成果ということになろう(3)。

だとしたら、日本で「現実主義」的と見做されてきた人的連関はいかにして醸成されたのか。本稿ではその生成と展開を秩序立てた仕組みに焦点を当て、当事者の回想録やオーラルヒストリーなどに記された断片を紡ぎ合わせながら考察する。本稿で主に視野に入れるのは、マルクス主義が学界及び言論界を席巻した1950年代を始点として、「現実主義」的と見做される少数の知識人（高坂など）が存在感を示し始めた時期を経て、彼らの活動を通して築かれた地盤が次なる世代へと継承され始めた1990年代までである。

具体的には、内閣調査室（土曜会、政策科学研究会、日米研究会）・粕谷一希（中公サロン、サントリー文化財団）・ゼミナール（高坂ゼミ、佐藤ゼミ）

員を務めていた記憶がある」という。毎年選考の時期が近づくと電話である著作物についての印象を尋ねられ、御厨が肯定しようが否定しようが佐藤からの反論がなされる「事前選考委員会」の如き様相を呈したようである。

（3）このような研究関心の不均衡を均そうとするならば、丸山眞男（酒井 2006；大賀 2011 など）や坂本義和（石田 2014；前田 2022 など）といった理想主義的と見做されてきた論客における「現実主義」的な思惟様式に迫るという戦略が採られることになろう。

が磁場となって、一定の知識人が重層的に関わり合う諸契機が生み出された様子を時系列で再構成していく。ここから敷衍して考えられるのは、内閣との関わりを持つ知識人を結節点とした人的連関が言論界で求心力を得たことで、市井の人の現実感覚とは離れた「現実（主義）」を上位に据えた価値序列が社会的に醸成された可能性である。思惟様式の類似性として「現実主義」を捉えるのではなく、言説空間におけるヘゲモニー闘争という一面に光を当てたい。

Ⅱ.「現実主義」の誕生——1950年代から60年代

「現実主義（者）」という概念の外延は多岐にわたる。外交・対外政策論の分野に限って言えば、高坂正堯、永井陽之助、神谷不二、若泉敬などが代表的な人物として挙げられるだろう。1960年代の論壇の文脈に即して言えば、山崎正和や村松剛なども含まれるかもしれない(4)。これらの論客たちに「現実主義」的な色彩を帯びさせた契機について、本章では1950年代から60年代の動向を視野に入れて考察しよう。

1. 黎明——内閣総理大臣官房調査室による学生土曜会支援

山崎正和は自身のオーラルヒストリーのなかで、高坂や永井などの名立たる知識人たちとの交流について振り返っている。インタヴュアーを務めた御厨貴はそこに東京大学本郷キャンパス（特に法学部）の人々が現れないことに着目し、次のような意味ありげな感想を残している。

（4）ここに挙げた人々は「現実主義」の他にも様々な切り口と名称で括られてきた。例えば待鳥聡史は、「戦後の日本を基本的に肯定的に評価しながら、戦前に回帰することを拒絶し、しかし左派的なやり方で日本をよくしようとすることに対しては懐疑的であるという点で、『戦後日本の非常に真ん中の考え方』を持っておられた（中略）人たちのグループを適切に表現するラベルがない」と感じ（池内・細谷・待鳥 2020：219）、これらの人々の一部を「近代主義右派」という概念で括っている（待鳥 2020：78-82）。また、これらのグループに必ずと言ってよいほど含まれてきた山崎正和は、自らの立場を「マイルドな理想主義」（片山 2021：3）と言い表している。どのような立場と対峙した人々のグループと見做し、いかなる思想体系の中に位置づけようとするかによって、用いられる概念に違いが生じてきた。これらの呼称に見られる幅は、そこで括り取られる人々の思想の多面性を示唆している。

> 従来の学的主流ではないところで、どうしてこれだけの人たちが集まったの、と思われるメンバーですね。粕谷[一希――大山註]さんの影響力も多少はあったのかもしれません。しかし最初のところを考えてみれば、ある種の強制的な凝集力がないと、たぶんうまく結びつかなかったでしょうね。いまだから不思議に思わないけれど。（御厨・阿川・苅部・牧原編 2017：140）

啓蒙近代以来の設計主義的な精神に抗し、第二次世界大戦後のアメリカで発展を遂げた政治的リアリズムに関して言えば、政治的リアリストと呼びうる知識人グループの生成時にロックフェラー財団などの凝集力が作用したことが知られている（Guilhot 2017）。アメリカの政治的リアリズムだけでなく、日本の「現実主義」の生成時にも「ある種の強制的な凝集力」が作用したのであるならば、知識人たちを結びつけた契機を詳らかにしなければならない。

最初の契機として考えられるのは、内閣総理大臣官房調査室（1957年より内閣官房内閣調査室に改組）による知識人への関与である。特に戦後占領期から1960年代に至るまでの日本の社会秩序が流動的に見えた時代には、アメリカの政府系機関及び民間財団が日本の人文・社会科学――例えば、アメリカ研究（松田 2015など）やアジア研究（牧田 2103；辛島 2015）、中国研究（市原 2015）など――を手掛かりとして、日本の共産主義化を防ぐための文化的関与を深めていた。こうしたアメリカの対日文化戦略の展開に対し、日本国内でも財界を中心とした保守層が呼応したことで、日米関係民間会議（下田会議）の開設に繋がる動きも生まれた（楠 2014）。これらの動きと並行して、アメリカの CIA（Central Intelligence Agency）と「蜜月関係」にあった内閣総理大臣官房調査室が軸となって、日本国内でも進歩的文化人に抗する試みに着手されたのであった（岸 2019：45-49）。

その中核を担ったのは、同調査室で文化担当となった志垣民郎である。志垣が手掛けた事業の一つとして、内外文化研究所編『学者先生戦前戦後言質集』（全貌社、1954年）の編纂が挙げられる（志垣・岸 2019：24）。同書では戦前から戦後にかけて、軍国主義から民主主義及び平和へと礼讃の対象を無批判にすり替えた31名の「学者先生」を取り上げて、「世の大家然とした学者先生が、如何に迎合的であり、無節操で、且つ人間的弱みをもつているか」

を示すことを目指していた。この試みは時の吉田茂内閣総理大臣に評価されて閣議で言及されただけでなく、中央公論社の粕谷一希を介して同社社長の嶋中鵬二や関わりのある学者たちにも広められたようである（志垣・岸 2019：27、29）。

志垣は進歩的文化人への言論攻勢と合わせて、反共知識人との友好関係の構築も行っていた。なかでも重要な意味合いを帯びたのが、東京大学法学部を中心とした学生土曜会への支援である（岸 2019：107-112）。土曜会は1950年に発足した組織であり、全日本学生自治会総連合（通称、全学連）に反発して生まれた学生民主化同盟を前身とした。「一見サロン的な感じ」の名称だが「その実体はまったく逆」で、官庁や言論機関、商社など各界への進出を通して「日本の改革を主体的に推進する」ことを目指した組織であった（矢崎 1959：i）。実際に、佐々淳行（後に内閣安全保障室長）、若泉敬（後に沖縄返還交渉密使）、矢崎新二（後に防衛事務次官）、藤波孝生（後に内閣官房長官）などの錚々たる人々を輩出し、そこには学生時代の粕谷一希も含まれていた。

土曜会は内閣総理大臣官房調査室などから供与された資金を活用し（岸 2019；108-111）、学生団体ながらも密度の濃い活動を行っていた。芦田均元内閣総理大臣を筆頭として、政治家や外交官、社会科学系を中心とした学者など、各界の指導的人物を招いた講演会を開催したり（後藤 2010：52-59）[(5)]、各会員の論考や講演会の概要などを共有する媒体として機関誌『時代』を刊行したりすることで、会員同士で問題意識を喚起しながら思考の錬成を図っていた。志垣によれば、「東大は左翼勢力が強く、出版物等でも負けそう」な状況下で、『時代』刊行は左翼勢力への「対抗策」となるものであった（岸 2019：110）。

この機関誌刊行事業で、創刊号（1952年9月）から第3号（1953年8月）まで編集長を務めたのが粕谷である。粕谷は自ら積極的に土曜会に関わり始めたというよりも、新居光（新居善太郎の子）に「おまえは雑誌ヅラしているから入らないか」と誘われて加入したという経緯であった（粕谷2006：41）。

（5）こうした土曜会の活動を軸とした人的連関の広がりについて、佐々淳行（2003：242）は「政・官・財・言論界の重鎮たちに学生の身で堂々と会えたのは、ぼくらが全学連と真正面から戦っていた自称“戦闘的自由民主主義者”で“体制内改革派”だったからにほかならない」と振り返っている。

だが、機関誌編集の重役を務めるなかで粕谷は土曜会活動に入れ込んでゆき、大学卒業後もたびたび『時代』や『土曜会会報』に稿を寄せるほどの熱量にまで発展した。官房調査室の土曜会支援は、粕谷という個人が雑誌編集や執筆を生業とする契機となり、延いては後に言論界の構図が変わりゆく一つの布石にもなったと見ることができよう。

土曜会の活動は、会員間で世代を超えた繋がりも生み出していた。その一例として挙げられるのが、20歳の年齢差がある粕谷（1930年生）と坂本多加雄（1950年生）(6)の「奇縁」である（粕谷 2005：1）。坂本の土曜会入会を機に二人の接点が生まれ、坂本が大学院生になる頃には「読書会のリーダー格で、十名前後の学生を率いて我が家にやってきた」と粕谷に言わしめる関係になっていた（同上）。1979年頃になると、坂本は北岡伸一や御厨貴と一緒に「フリー(・)トーキングの会」なる勉強会を始めており(7)（北岡 2005：1；御厨 2005）、御厨の記憶によれば1980年代には坂本の誘いで粕谷邸に「よく伺った」ようである（御厨 2015：51）。坂本の葬儀では粕谷が葬儀委員長を務め、そこでの挨拶でも土曜会の思い出を語っていたという（西尾 2002）。

かくして土曜会の活動は、粕谷や佐々、若泉といった1930年代初頭生まれの初期会員たちが同世代の結びつきを強めつつ各界の重鎮たちと交流する契機となっただけでなく、会員間では世代を超えた繋がりをも生み出す契機ともなっていた(8)。その「最初のところ」で「ある種の強制的な凝集力」となったのが、内閣総理大臣官房調査室による進歩的文化人に抗するための施策であった。この施策は体制内改革を志向する少数派たちの繋がりを生み出す活動を下支えし、一部の会員に対しては「『新しい時代』創造への気魄と意慾」（土曜会 1959）を涵養するという成果をもたらしていた。

（6）早逝により回顧録等が残されていない坂本多加雄の思想形成について、鈴木健吾（2023）は坂本の土曜会時代の言論にまで遡って考察し、坂本が高く評価する文献や人物などの次元で粕谷の影響を受けていた可能性や、アイデンティティないし主体性に関する関心が坂本の思惟様式を規定した可能性などを指摘している。

（7）フリー・トーキングの会は10年ほど続いたとされている（北岡 2005：1）。

（8）これらのメンバーのほかにも、谷内正太郎（後に外務省事務次官等）や盛山和夫（後に東京大学教授（社会学））、伊奈久喜（後に日本経済新聞特別編集委員（外交・安全保障担当）等）、などが土曜会に参加していたことが『時代』のバックナンバーから見て取れる。

2. 誕生――粕谷一希を軸とした非公式ネットワーク

粕谷は『時代』の編集長を務めたことで「人に原稿を依頼して、雑誌にすることがいかにおもしろいか」を実感し（粕谷 2006：43）、1955年には中央公論社に入社している。そして1961年には31歳で『中央公論』編集部次長となり、67年に退任するまでの5年間で「現実主義」的な論調を押し出した（根津 2008）。粕谷と同年の生まれで『文藝春秋』編集長などを務めた半藤一利（2015：79）によると、知識人を集めて異論をぶつけ合わせながら新たな知性を強固に組織化し、現実を突き動かす力へと思想を昇華させた点において、粕谷は他の編集者が手を付けない仕事を成し遂げた人物と化すことになる。

かかる編集者像が粕谷の内から現出し始めた時期として、ここでも土曜会時代にまで遡る。『土曜会会報』に載せられた粕谷の文章を見てみると、「イデオロギーや固定したイズム」で縛られずに「課題を等しく自覚する者」を「同志」と捉え、同志間で「如何にすべきか」を「共同探究」する場として土曜会を位置づけており、ドグマに抗する実践性を大学時代から重んじていたことが明らかである（粕谷 1954a）。粕谷はその文章のなかで島木健作『生活の探求』（1937年）の「雰囲気がこの上なく好き」と述べながら、「職場の体験と生活という土壌に根差さない思想」を拒絶し、「現実に責任ある実践に踏み出せない主義綱領などをふりかざしても何の意味もない」と断じている（同上）。これらの記述から読み取れるのは、多様な日常からの帰納的思考を通した人格形成を経て、実世界にマルクス主義とは違った形で実践的に関与する意思を伴った現実感覚である(9)。土曜会に入るまでは一人書斎で観念的彷徨を繰り返していたものの、そこで培われた思念が「土曜会によって形となり、陽の目を見た」と大学卒業時に書き残しているように、粕谷一人で育みえた志向ではなかっただろう（粕谷 1954b）。粕谷にとって土曜会での活動は、共同探究を基礎に雑誌編集を通して思考の結晶化を図り、現実世界との

---

(9) 粕谷は大学卒業後も土曜会の会報等に稿を寄せている。その中の一つで機関誌『時代』を説得力のある「読める雑誌」とすべく、①観念的発想ないし演繹的論法を排して具体的な生活経験に根差した人間的滋養及び実践力に結びつけること、②政治情勢に過敏に反応せず人間及び社会の様態を克明に記録する作業を通して長期的な日本の設計を目指すこと、の重要性について論じている（粕谷 1960：3）。現実への実践について、短期的な情勢に左右されるべきではないと考えていたことがここから読み取れる。その他、粕谷の知的基盤について大学進学前から河合栄次郎などに影響を受けてきたことを根津朝彦（2008：61-65）が整理している。

再接続を模索する意思を培う場となったと考えられる。

その意思が再び具象化されたのが、粕谷が『中央公論』編集次長時代（主に1961～66年）に主催した「中公サロン」であった（粕谷 1999：169-170）。ちょうどこの時期には、戦時中に懐かれた崩壊感覚が薄れるとともに高度経済成長に支えられて大衆ナショナリズムが現出し、「国家」や「民族」、「近代」などの基礎的な概念が変質していた（小熊 2002）。そのため、蠟山政道や松本重治といった「戦前からのエスタブリッシュメント」は「もう古い」と見られやすく、戦前以来の言説圏に属さない新世代の執筆陣を押し出す必要性を粕谷は嗅ぎ取っていた（粕谷 1999：194）。そこで「現実主義者の平和論」（1963）で名を馳せた高坂正堯をはじめ、萩原延寿、永井陽之助、山崎正和、村松剛(10)などの新たな執筆陣を知人伝いに発掘し、彼らと月に一度ほど酒を飲みながら雑談を交わすサロンを開いたのであった。

土曜会時代の粕谷の言葉を借りるなら、中公サロンは「同志」の集いと言いうる場であった。サロンに参加していた山崎正和によると、そこに集まった人々は「日本という存在が非常に薄い氷の上に乗っていて、いつひびが入るかわからない」という切なる危機感を共有しており、それぞれの所属大学では「一匹狼を誇りにしている」ような孤立状態に置かれていた（御厨・阿川・苅部・牧原編 2015：120）。後に粕谷（2006：212）が「もともと、私が総合雑誌でやりたかったことは異分野交流だった」と中公サロンに絡めて振り返っているように、孤立した「同志」を集めて土曜会時代から意識してきた「共同探究」を再実践したのが中公サロンであったと見ることができよう。共同探究と並行して誌面上にも新たな思潮が可視化されるようになると、外部からは高坂論文にならって「新現実派」という一括りの運動体と見做されたり（御厨・阿川・苅部・牧原編 2015：120）、サロンの存在を知る人からは「粕谷学校」と呼ばれたりしたようである（塩野 2015）。渦中の論客たち

(10) 村松剛を軸とした保守派知識人との交流については、神谷光信（2023）が詳細に描き出している。村松は中公サロンのほかにも、内閣官房内閣調査室の防衛問題懇談会「かすみ会」（1964 年 12 月に正式命名）などで粕谷と同席しており、その頃は村松も粕谷もともに内閣と近い位置で仕事をしていたものの、1970 年代以降は日本を守る国民会議など政治的実践に重きを置いていく村松に対して、粕谷たちがサントリー文化財団等での言論活動を足場にしつつ内閣との関わりを継続するという対照的な歩みなどが捉えられている。

は「現実主義」を安易なレッテルとして用いることに慎重であった一方で[11]、対立構図が生まれやすい論壇という象徴闘争の場のなかで、人間関係の分断と固定化を促していく磁力が働き始めていた。

3. 接続――思想と現実の往還錬成

こうして「現実主義」的な人的連関が生まれたことで、そこに関わる人々が様々な形で内閣との繋がりを広げていくことになる[12]。例えば、内閣官房内閣調査室の志垣に高坂を紹介したのは粕谷であり、早くも1964年2月には志垣と高坂が話した記録が残されている（志垣・岸 2019：172）。反対に、粕谷に見い出されて論壇活動を活発にした山崎正和が軸となって、佐藤内閣で首席秘書官を務めた楠田實に粕谷や田中健五（文藝春秋）を紹介している（楠田 2001：884-885など）。志垣と思われる「Sさん」[13]の側では『文藝春秋』や『中央公論』などの著作目録を作成しており、逸早く「『現実派』の台頭をキャッチ」して論者たちの結集を図っていた（大森 2005：40）。佐藤栄作内閣期には木村俊夫官房長官が主宰するブレーン集団「錦章会」に永井陽之助や神谷不二を斡旋するなど[14]（志垣・岸 2019：85-88）、志垣もまた政

---

(11) 高坂正堯は理想主義を批判するだけでなく、「国家が追及すべき価値の問題を考慮しないならば、現実主義は現実追随主義に陥るか、もしくはシニシズムに堕する危険性がある」（高坂 1963：41）とも述べており、「『現実主義者』を変質させること」も目論んでいたようである（高坂 1965：188）。他方で、高坂の論敵とされた坂本義和も「『理想主義』対『現実主義』という両分法は無意味である」と述べ、「そのようなカテゴリーを用いること自体、価値体系が、とくに現代国際政治で重要な役割をになっているという現実の役割を看過するような視角を、初めから設定してしまう危険」を指摘している（1965：49）。両者ともに国際政治における価値の問題の大きさを念頭に置き、安直な「現実主義」の使用を危惧していた。

(12) 外務省国際資料部で開かれた国際関係研究会では、高坂、神谷、永井を招いた一方で、「進歩的文化人」は「意識的に排除」したと言われている（村田 2008）。

(13) ここで引用した大森義夫（1993～96 年まで内閣情報調査室室長）の回顧のなかで、「内調が論者たちを結集できたのには縁の下の力持ち、Sさんという白髪の担当者がいた」（40）などと記されていることについて、「志垣民郎旧蔵 内調資料」を監修した岸俊光が志垣本人に訪ねたところ、「『これは自分ではない、白髪ではなかった』と一笑に付した」ようである（岸 2023：4）。

(14) 木村俊夫が積極的にブレーンを活用していることを前提として、佐藤内閣は 1968 年 11 月に内閣改造を行って、保利茂官房長官－木村俊夫副官房長官－楠田實首席秘書官の三者連携を通じた「大型官房」の設置に漕ぎつけていた。制度改革を行わず人事運用を通して官邸機能を強化する方法が採られており、佐藤内閣長期化を支えた政治手法として後の内閣にも継承されたと見られている（市川 2022）。

治指導者層とブレーンの紐帯を生み出す結節点となっていた。

佐藤内閣の首席秘書官を務めた楠田實を介して内閣総理大臣とブレーンの個人的紐帯の構築が促され、「現実主義」的な知識人たちが政策決定過程に関与を深めたことは知られている（佐藤 2021：50-51）。ただ、知識人と内閣の結びつきは偶然生み出された属人的な関係では決してなく、志垣や粕谷が連ねてきた布石なくして成り立たなかった紐帯であろう。この人的連関に深く与した知識人にとっては、内閣が向き合う政策課題を自らの現実感覚に取り込んで考察を深める契機となる一方で、それらの知識人たちが象徴闘争の場でも存在感を増してゆくことで、長い時間をかけて一部の「現実」が反響し世に流布する現実感覚が縮減してゆく可能性をも秘めたものであろう。

Ⅲ.「現実主義」の再編——1970年代～90年代

1970年代に入るや否や、「現実主義」に近しい論壇の寵児たちも含めて論壇の凋落を指摘する声が相次いだ（根津 2013：72-74）。実際に『中央公論』は1971年以降購買数を激減させており、70年代後半には他誌も含めて総合雑誌が恒常的な低迷に悩まされるようになる（竹内 2014：39-42）。論壇の象徴闘争を通して生み出された「現実主義」は、この時期にいかなる変遷を辿ったのか。本章では1970年代から90年代の動向を視野に入れて考察しよう。

1. 再結集——政策科学研究会、日米研究会、対外政策研究会

日本の「現実主義」を取り上げた先行研究を見渡しても、1970年代以降の動向を俎上に載せた論考は殊のほか少ない。大平正芳内閣などで設けられた私的諮問機関に学者が参画したことへの言及は多く見られるが、個々の論争や広く見られた思惟様式を浮き彫りにする論考はわずかに止まっている(15)。これはただ研究の進展が遅いというわけでなく、かつて「現実主義」を下支えした論壇という場が低迷し始めた時期であることと無縁ではないだろう。

(15) 数少ない研究として、1970 年代末に繰り広げられた関嘉彦と森嶋通夫による防衛論争の内幕を詳らかにした論考（森田 2021a；森田 2021b）や、その後に繰り広げられた猪木正道と中川八洋の論争及び永井陽之助と岡崎久彦の論争まで視野に入れた考察が見受けられる（張 2021）。

ちょうどこの時期、1971年5月に内閣官房内閣調査室の志垣民郎が設置したのが政策科学研究会（PSR: Policy Science Research）であった。香山健一[16]が学者側の取りまとめ役となり、山崎正和、高坂正堯、公文俊平、中嶋嶺雄、黒川紀章などを初期メンバーとして、月に一度開かれる「国家の政策を考える勉強会」が始められた（志垣・岸 2019：89-103；御厨・阿川・苅部・牧原 2017：135）。1972年6月には、アメリカ帰りの佐藤誠三郎もここに加わる。志垣はこの集まりを見て「これらの優秀な人々がいれば、日本の将来は大丈夫だ」と感じ、1978年の引退へと心が向かうことになったという（志垣・岸 2019：90）。1997年には北岡伸一[17]、2003年には五百旗頭真、他にも複数名が PSR に加わっており、時折メンバーの追加が行われながら2018年頃まで続いたようである（北岡 2020：174；神戸大学大学院法学研究科 2005：76；五百旗頭インタビュー 2017）。

PSR によって新たに生まれた人的連関はいくらかあろう。確実に言えるのは、山崎と佐藤の出会いの契機となったことである。両者の付き合いは PSR に始まり意気投合し、山崎から佐藤にサントリー学芸賞の審査員を依頼したり、佐藤から山崎に笹川平和財団を紹介したり、互いに相手を引っ張り出す関係となったという（御厨・阿川・苅部・牧原 2017：126）。ほかにも、1974年から77年にかけて『文藝春秋』に「日本共産党『民主連合政府綱領』批判」（1974年）や「日本の自殺」（1975年）などを寄稿した匿名の学者集団「グループ1984年」も PSR のメンバーが深く関与したものであった。同グループの中心人物は香山健一で、出来上がった原稿を『文藝春秋』編集者に手渡したのは山崎正和であり、彼らに加えて公文俊平や佐藤誠三郎も関わって

---

(16) 北岡伸一や坂本多加雄、御厨貴が行っていたフリー・トーキングの会（本稿 6 頁）はいくつかの会合に発展しており、そのうちの一つに「香山健一さんを囲む会」（1983 年から 4 年ほど：後述する日米研究会の 2 年ほど前に開始）という集まりがあったという（御厨 2005）。ここには、北岡や坂本、御厨のほかに、坂本孝治郎などの香山が所属する学習院大学法学部の若手が集ったようであり、御厨の視点からは「中曽根政権の裏話や自民党のあり方など、この会を通じて、我々は現実政治の考察へと少しずつ歩みを進めていったように思う」と振り返られている。1970 年代以降、香山健一、ないし黒川紀章を所長として香山も参画した社会工学研究所（1969 年設立）が、内閣との新たな結節点として機能を整え始めていたように思われる。

(17) 「内閣情報調査室における研究会の概要［平成 6 年度研究会一覧表］」という文書によれば、北岡伸一は 1994 年度の時点で「国内政治と世論動向についての調査・研究」を担当する「政治社会研究会」（年 9 回開催）の代表者を務めている（角田 2001：253）。

いたようである（田中 2012）。

PSR のメンバーは1930年代前半生まれの世代が中心で、1980年代には彼らも重鎮と見られる立場となってきた。そこで PSR の下部組織のような位置づけで次世代の発掘を担ったのが、内閣官房内閣調査室が設置した「日米研究会」であった。1985年に社会工学研究所の社長などを務めた牛尾治朗が座長となり、牛尾とはアメリカ留学時代から親交があった緒方貞子もメンバーに含めつつも（牛尾 2019）、五百旗頭真（1991-2003年に参加；神戸大学大学院法学研究科 2005：76）、北岡伸一、田中明彦、島田晴雄、といった次世代メンバーを加えた集まりである（五百旗頭インタビュー 2017）。月1回ほど開催された研究会で交わされた議論は「政治と経済、国内と国際にまたがりつつ、政策志向の緊張」があり、「内閣調査室の活動でありながら、その枠を超えるものだった」ようである（五百旗頭 2019a）。この場には官房長官や副長官が現れてメンバーに意見を求めることもあったという（五百旗頭 2019b）。五百旗頭は2003年に PSR に引き上げられているものの、日米研究会の方が迫力を帯びていたと振り返っている（五百旗頭インタビュー 2017）。

PSR と日米研究会という異なる世代を集めた2つの研究会を紡ぎ合わせた場として、楠田實が自らの楠田事務所で主宰した研究懇談会も無視しえない。1989年1月には通称「対外政策研究会」が集められ（五百旗頭 2019c；五百旗頭インタビュー2017）、京極純一、山崎正和、萩原延壽、高坂正堯、中谷巌というお馴染みの年長世代に加えて、五百旗頭真、猪木武徳、猪口孝という1940年代半ば生まれの人々も初期の委員に加えられている（楠田 1989）。毎年異なる調査研究名で産業総合研究所からの支援を得て、中西輝政や入江昭、中嶋嶺雄、田中明彦などの新たなメンバーが出入りしながら、2002年まで調査研究を続けている様子が窺える。楠田實資料を編纂した和田純（2022：15）は、「佐藤政権期以来のブレーンとなってきた識者の人脈をつなぎ、その新陳代謝を繰り返しながら、文明史的な観点から時代認識とあるべき国家像を論議したものだが、後年には梅棹忠夫を囲む会といった趣旨も加わり、かつての『中公サロン』を彷彿とさせる」場であったと整理している。

かくして再び内閣官房内閣調査室や楠田實が軸となって、山崎や高坂といった1930年代生まれの横の繋がりを新たに生み出す PSR を立ち上げつつも、1980年代からは日米研究会や対外政策研究会を立ち上げて1940年代以降に生

まれた五百旗頭や北岡などの新世代の組織化にも乗り出していた。五百旗頭や北岡、田中といった新世代の学者たちが論壇誌に寄稿し始めたのも同時期のことではあるものの、高坂「現実主義者の平和論」（1963年）や永井「日本外交における拘束と選択」（1966年）のようには論壇で耳目を集めたわけではないだろう。だとしたら、論壇誌が衰勢に向かう時代において新世代の学者たちは如何にして発掘されたのだろうか。次節ではその一つの装置としてサントリー文化財団に焦点を当てて見てみよう。

2. 再生産――サントリー文化財団の制度設計

PSR の設置からしばらくして、1979年にはサントリー文化財団が設立された。財団設立に向けて歯車が急転し始めるきっかけは、山崎正和の発言だったという。旧知の佐治敬三（創業者鳥井信治郎の次男、後にサントリー文化財団の初代理事長）から、創業80周年記念事業で何かできないかとサントリー社員を介して尋ねられた際に、「何か長く続くもの」として「財団というシステム」が「瞬間的にひらめいた」と山崎は振り返っている（片山 2021：79）。日本は経済大国と化しながらも、「文化的には、自己の特性を普遍的な言葉で表現し、独自の地位を認められる段階にはまだ到達して」おらず、世界の進歩に貢献するための「基本条件」として「国際的な視野で日本の文化と国民性を再発見」することが欠かせないという時代認識を刻み込んで同財団は設立された（サントリー文化財団 1979）。この設立趣意書は、PSR の第一回会議で山崎が語っていた問題意識「『日本の顔』――ナショナル・イメージの貧困」が流れ込んだものであろう（志垣・岸 2019：90）。

佐治理事長は同財団の実質的運営を山崎に託しており（片山 2021：84）、その結果として山崎の構想が多分に反映された体制が生み出された。例えば、初代理事には山崎をはじめ高坂正堯や小松左京など10名が就任し[18]、初代評議員には梅棹忠夫などに加えて、78年に中央公論を退社していた粕谷一希も名を連ねたように、山崎の知人を結集させた組織として出発している（片山 2021：112；粕谷 2014：396-397）。事務局についても、少数精鋭で一人ひと

(18) 粕谷の回顧によれば「財団発足にあたっては、山崎さんと高坂君の二人が中心になっていた」ようであり、高坂が果たした役割も大きかったと述べられている（粕谷 2006：186）。

りが大きな機能を担うという山崎案が取り入れられて、機動的で瞬発力のある組織運営が目指された（片山 2021：113-115）。こうした背景には、左翼イデオロギーの地盤沈下に伴って学界で専門分化が進む一方で、広い分野を見渡した総合的な考究が芽生えてこない「ある種の沈滞状況」に陥った日本の思想界を危惧する山崎の問題意識があり、同財団では評論部門の再活性化を見据えて「隙間産業」を展開することになった（御厨・阿川・苅部・牧原 2017：214）。

サントリー文化財団の一連の事業を支えた全体構想として、山崎は次のような人材育成プロセスを描いていた（同上：270）。①まず若手の優秀な人々に研究助成を供与し、②成果が出たらサントリー学芸賞で表彰する、③そして受賞者には特別研究助成の対象になる共同研究を企画してもらい、④さらに活躍する人々を学芸賞の選考委員に組み上げる、という流れである。全体を通して目指したのは、かつて粕谷が主宰した中公サロンの再現であり、選考委員会や研究会の後には自由闊達な議論を楽しむ宴会が設けられた（同上：218）[19]。そのためにも、選考委員には山崎や同財団が信頼する人々を選出し、「選考委員の独断専行」で「ユニーク」なものを選ぶという「実質主義」が貫かれた（同上：216）[20]。粕谷の言葉を借りて言えば、サントリー学芸賞の選考委員たちの顔ぶれは、「当時の文春ジャーナリズムと中公ジャーナリズムが非常にいい形で融合」したものであった（粕谷 2006：210-211）。かくして制度化された財団が生まれたことについて、ロックフェラー財団やフォード財団のように「世界戦略などとは言えないけれども、かろうじてミニチュア版は出発した」と粕谷は評価している（粕谷 2006：142）。

その後のサントリー文化財団の活動は目覚ましく、「2000年代の日本の言論界を展望して、その半ば以上をサントリー学芸賞の受賞者が支えているとい

---

(19) 別の場所で山崎は、「私が物書きになったころ、『中公』の粕谷さん、河出書房の『文藝』の坂本一亀さんなど、名編集者がいました。私がこの二人から学んだのは、一種の“知的サロン”をつくることの意味です。私が同時代の文学関係者や学者たちに会ったのも、そうした会でした。酒を飲みながら、みんなでワイワイやっていました」と『文藝春秋』から受けた影響にも触れている（片山 2000：212）。

(20) 山崎は「サントリー文化財団は民間財団だから、『公正であれば、公平でなくてもいいのです』」と語っていたようで（小島 2020：263）、オーラルヒストリーの中でも「官僚的公平主義を採りません」と述べている（御厨・阿川・苅部・牧原 2017：216）。

っても、傲慢のそしりを免れるはず」と山崎に自負を与えるものとなった（山崎 2009：11）。政治・経済部門に絞って1990年代までの受賞者を並べてみても、五百旗頭真（1985年）、北岡伸一（1987年）、白石隆（1992年）、田中明彦（1996年）、御厨貴（1996年）、村田晃嗣（1999年）など、1990年代以降に政府の審議会及び私的諮問機関等で活躍する論客の多さが際立っている(21)。こうしてみると、論壇という日本固有の文脈に根差した「現実主義」から、英語を中心とした国際標準――あるいは「普通の国」の行動基準――と結びついた「リアリズム」へと世代交代時に衣替えし(22)、官邸主導の進行と絡み合って存在感を強めてゆく「有識者」の一つの通過儀礼としての位置取りを確立していったと言えるだろう。

サントリー学芸賞で「異分野の学者と語り合うこと、素人にわかる言葉で語ること」を重んじたことに象徴されるように、財団全体としても閉鎖的な知的空間に新風を吹き込むような横の繋がりを生み出す「知のサロン」化を目指していた（片山 2021：133、212）。これは粕谷が総合雑誌で――さらに遡ること土曜会時代から――試みてきた「異分野交流」と重なるものであり（粕谷 2006：212）、これを財団の中核に位置した山崎や高坂が引き継いだと見ることができよう。ただ、その粕谷は、現代政治研究の科学化に寄与することになる専門誌『レヴァイアサン』の創刊時に(23)、その発刊趣意（村

(21) 同賞の選考委員を務める苅部直は、「選考委員の間で明確な路線の意識のようなものがあったわけではないと思いますが、朝日や岩波書店に代表されるような、リベラル派の政治論・社会論ではなく、実証的な手堅い研究をしている人に与えようという意図はあったんでしょうね。そして、五百旗頭先生や猪木先生たちがその後も活躍したことで、学問の主流の方も変わっていった。」と振り返っている（苅部・細谷 2022）。

(22) 例えば、粕谷（2006：186）が「高坂君については、田中明彦（1954-年、政治学）君が『残念なことに 80 年代 90 年代のアメリカの政治学界を知らない』と批判している」と振り返り、田中自身も北米で繰り広げられた学術論争を踏まえて日本の動向を位置づけていたように（田中 2000）、論壇の衰退に伴って一つの軸足が北米を中心とした英語圏の学術論争に推移した様子が窺えよう。また、田中などと一緒に小沢一郎『日本改造計画』（講談社、1993 年）の執筆を務めた北岡伸一においても、『日米関係のリアリズム』（中央公論社、1991 年）や『「普通の国」へ』（中央公論新社、2000 年）などで知られるように、変転する国際潮流のなかでの生存戦略と政治指導に軸足を移し、日本社会一般に浸透した平和主義的な言説に対峙するものとなっている。かくして論壇に主軸が置かれた時代の後に台頭してきた世代では「現実主義」に馴染みの悪さが感じられるようになり、その問題意識を一部引き継ぎながら「リアリズム」へと改められたと見ることもできそうである。

(23) 大嶽秀夫（2021：188）の回顧によれば、「政治学の雑誌をつくらないか。『中央公論』と『政治学会年報』の中間をいく感じの雑誌にしよう」という村松岐夫の提案が『レヴァイアサン』発刊に繋

松・大嶽・猪口 1987）に対して、歴史や思想史、外国研究はすぐれた批判を可能にする洞察力を養うもので、「片手間に印象評論をやってきたわけではあるまい」と反論したこともあった（朝日新聞 2007年8月23日）。御厨貴が「サントリー文化財団の周りにお集まりの皆さんは、もっと若い方を含めて学問的スタイルの点で似た人が多い」と語っているように（御厨・阿川・苅部・牧原 2017：339）、粕谷の発言は開放的なサロン――あるいは政策に活かされやすい学知――であっても不可視化された境界線が存在することを示唆していよう(24)。科学や政治的合理主義への忌避感を払拭し、政治的リアリズムの更新を成し遂げたアメリカの推移とは対照的な動きであった（Guilhot 2017）。

3. 自生的発展――佐藤誠三郎と高坂正堯という磁場

内閣情報調査室やサントリー文化財団を契機とした関わりに加えて、大学という場も人的連関を再生産する契機となってきた。PSR やサントリー文化財団などで中心的な役割を担った山崎を取り巻く人的連関を眺めてみても、東京大学であっても駒場キャンパス（教養学部）に属する人々との交流が多かった一方で、本郷キャンパス（法学部）の人々との交流が薄かったことが明瞭である（御厨・阿川・苅部・牧原 2017：139）。

こうした人的連関について、長らく駒場に身を置いていた渡邊昭夫は仮説的に「駒場スクール」と呼んでおり、その中枢には村上泰亮や公文俊平、佐藤誠三郎がいて、自身については「若干それを外から見るような、距離を置いて見てた」立ち位置として回顧している（加藤・板山・大山・河野編 2021：146-147）。そこで渡邊が続けて述べるのは、日本の安全保障論議のなかで高坂を主流と見做し、佐藤を傍流に位置づける一般的な見方への違和感

がる最初の動きであったという。

(24) 中公サロンでの経験について、塩野七生（2015：16）は「私は最年少で一人だけの女の子でもあったので、ほんとうのところは相手にしてもらえないときのほうが多かった」と振り返っている。また、山崎正和から「キミの作品はどの賞からも少しずれているんだ。だから、賞には縁がないと思ってあきらめるんだね」と言われたことについても触れ、その場では口に出せなかったものの、「どの賞からも少しずれているということは、それらの賞の選考委員たちが該当作の範囲を少しばかり広げてくれさえすれば、たいていの賞はもらえるということですよね」と「胸の内ではつぶやいていた」と記している。

である（同上：147-148）。渡邉にとって佐藤は大学時代以来の友人であって、渡邉が香港大学で就職したり（同上：20、90-91）、大平正芳内閣の政策研究会に参加したりする契機[25]を作ってきた無類の存在という特殊な事情を排しえないことは自覚しつつも（同上：97-99）、「どっちかって言うと……佐藤くんの活躍っていうのは、私の目には非常に印象深い」と振り返っている（同上：147）。ここに見て取れるように、佐藤誠三郎は1930年代及び40年代生まれの近い世代のあいだで人的連関を生み出す一つの結節点となっていた。

そして近い世代だけにとどまらず、佐藤は世代を越えた人的連関をも生み出していた。その一つのきっかけとなったのが東京大学教養学部で開かれたゼミナールである。「大量の読書を前提とする活発なディスカッション」で知られる佐藤ゼミからは多数の学者や官僚が輩出されており、ゼミで「獲得された知識は、現実的な力を持つ」ものであったと言っても過言ではない（北岡・舛添・北里 1992：ⅱ）。ゼミ生にあたる御厨貴が「先生、弟子の中で、だれがいちばん優秀ですか？」と尋ねた折には、「一番は北岡伸一（国際協力機構理事長）、二番は田中明彦（政策研究大学院大学長）」という答えが返ってきたとされているものの（日本経済新聞 2018年11月28日）、このほかにも、舛添要一、岡田克也、飯尾潤、神谷万丈、といった名立たる面々が関わりを持ったゼミであった。

一番弟子に挙げられた北岡伸一には、佐藤からも触発された視座を政策へと反映させた人物という一面もあろう。北岡は国際協力機構（JICA）の理事長という政策実施の責任者を務めた際には、近代化論的な枠組みを基礎に据えつつ日本の近代化の例外的「成功」に照準を絞った佐藤的な研究視座（酒井 2019：2-3）を投影するかの如くして、「日本の開発学」――JICA 開発大学院連携プログラム、JICA 日本研究講座設立支援事業（JICA チェア）、国際協力大学院大学の設置構想――を掲げた施策を国内外で展開させている（大山 2024）。「眼前の『現実』からは距離をとることから始まる」高坂とは対極的に、「徹底して『現実』に肉薄する中で『現実』を乗り越えようとする」アプローチ（森田 2011：33-34）が、佐藤を取り巻く人的連関のなかにはより

(25) 大平研究会の組織化において一翼を担った長富祐一郎は東京都立日比谷高等学校の出身で、日比谷高校出身者の人脈を生かして当時 40 代の若手を中心とした勉強会を作ったという経緯があり、その一人が佐藤誠三郎であったと渡邉は回顧している（加藤・板山・大山・河野編 2021：98）。

目につきやすいように思われる[26]。

細谷雄一は、坂元一哉（2000年度）や田所昌幸（2001年度）のサントリー学芸賞の受賞を振り返って、「高坂正堯門下の方々が、高坂先生の伝統を引き継いで、読み物としての面白さと、研究としてのダイナミズムというか、迫力ある高い水準のものを出された」と述べている（苅部・細谷 2022）。この述懐にも見て取れるように、従来の研究でも充実した著作活動に目を奪われてきたあまり、高坂正堯を中心に据えた思想連関を「現実主義」的なものとして汲み取る傾向が続いてきた。だが、重層的に醸成された人的連関という観点から照射を試みるならば、高坂と同様にして佐藤もまた一つの磁場を形成する存在として見落とせない。佐藤への光の当たりにくさこそ、思想連関として「現実主義」を捉えるなかで生じた盲点であったのだろう。

Ⅳ．緩やかな運動体としての「現実主義」

サントリー文化財団について、「政治学者が多い、理系がわかるひとも少ない」ことを苅部直は懸念材料として語っている（片山2021：304）。同財団が制度化して40年以上が過ぎており、いまや「閉鎖的な『知』の循環になっていないか」と見る向きもある（同上：305）。

思えば、土曜会時代から雑誌――多様な専門や属性を有する執筆者たちが入り乱れる誌面――の編集を務めてきた粕谷もまた、1988年からは外交専門の月刊誌『外交フォーラム』の編集に携わるようになっていた。そこで粕谷が常連執筆者として重用したのは、坂本多加雄や御厨貴、北岡伸一という近

(26) 高坂と佐藤の思想上のへだたりについて、岡崎久彦（2015：88）は「私と永井陽之助氏の論争というのは、高坂正堯・京都大学教授とのいわば代理論争だった」と振り返り、「私は今でも佐藤氏のほうが断然上だった思っています」と記している。その佐藤について、岡崎（2000：1-2）は「彼の国際政治論は、国際関係論からでなく、日本史の素養から来たものが大きい」という認識から、佐藤との対談を通してその歴史観及び政治哲学を示そうとしており、そこでは吉田茂への評価などで高坂との違いが見て取れる。佐藤の側でも「この人にかなう人は日本にはまずいません」と言いつつ、ゼミで岡崎『戦略的思考とは何か』を読ませていたというゼミ生からの回顧があるように、岡崎を高く評価していたことは明らかである（岡崎 2015：262-263）。こうしてみると、直接的な論争こそなかった高坂と佐藤について、その思惟様式の違いを読み解いていく作業は外交思想研究において意義を帯びた課題のように思われる。

しい人々であった（粕谷2006：263）。外交及び対外政策の実態が複雑化と細分化を遂げてきた事情もあるとはいえ、外交及び対外政策への焦点化を通して「現実（主義）」の範疇で汲み取られる認識の幅も縮減してきたように見える。2015年の安全保障法制の議論に際して、それまでは論壇誌等で政論を展開してこなかったゲーム理論やデータ分析を背景とする専門家たちが、安全保障のジレンマやシグナリング、安心供与などを掲げて表に出てきたのも、日本では政策と結びつきにくかった専門知の在処を改めて意識させるものであった。

そもそも、現実感覚は存在被拘束性を帯びたものである。島木健作『生活の探求』を好んだ土曜会時代の粕谷一希もそのことに自覚的であったに違いない。だが、粕谷が寄り添い続けた「現実主義」は、市井の人の日常生活からは離れて内閣に近い視点へと照準を絞ってゆく道筋を辿ってきた。政府間関係を形成する権力政治の位相は人々の日常生活にはほとんど表れない「現実」であるにもかかわらず、他の現実感覚を凌駕する重要性を帯びた位相と見做されている。そこで疑問として浮かび上がるのは、現実感覚の社会的分布を転覆させ、内閣に近い視点による「現実（主義）」を上位に据えた価値序列がいかにして醸成されたのかということである。

本稿で鳥瞰した歴史的変遷を踏まえると、知識人のネットワーク化を見据えた内閣官房内閣調査室の定期的な関与が看過しがたい影響を及ぼしていた。学生や研究者が大学に身を置いて教育や研究などに勤しんでも、政府が向き合う外交課題を自らの現実感覚に取り込む機会は一般的に多くはない。だからこそ、「現実主義」的な連なりに位置する知識人たちをPSRや日米研究会などに月1回ほどの頻度で招いて、時には官房副長官なども同席しながら国家の政策を思案させるという場づくりは、そこに加わった知識人たちが自らの現実感覚のなかに内閣に近い視点を内面化する契機となったと考えられよう。土曜会に属した粕谷が核となって「現実主義」を結晶化させた局面も含めて、内閣官房内閣調査室が対外政策を取り巻く論調に及ぼした影響は決して小さなものでない。

「現実主義」という名称は論壇の象徴闘争を通して言論界に流通し、象徴闘争の場の移ろいに応じて世代交代時に「リアリズム」へと装いを変えつつも、総じて内閣と近い距離感で時代の大勢――言論界の革新勢力や世論の平

和主義など――に抗った少数派の知識人たちに漠然とした輪郭を与えてきた。その中核に布置したのは、内閣官房内閣調査室などが整えた諸種の場で織り成された重層的な人的連関であり、「現実主義」を実体化するあまり思想連関まで過度に読み込もうとしてきたのかもしれない。「現実主義」に通底する思惟様式が明瞭にあったというよりも、思想面では相対的に見て取れる家族的類似性のような緩やかな連なりであったと考えたほうがよさそうである。

本稿では1950年代から90年代を主として、内閣との距離が近い「現実主義」的な人的連関を形成・維持してきた仕組みを大掴みに整理した。「現実主義」が言論界でかつてのような少数派ではなくなり、時には政策形成にも深く関与してきたことを思うなら、日本の対外政策形成を支える社会的機制の一端を視野に入れたことにはなるだろう。ただし、本稿で取り上げた期間においても、学会活動が盛んになったりシンクタンクが出てきたりと、ここで扱いきれていないことは多い。本稿で浮かび上がった諸種の論点については、稿を改めて検討することにしたい。

参考文献一覧

五百旗頭真・中西寛編（2016）『高坂正堯と戦後日本』中央公論新社。

石田淳（2014）「動く標的――慎慮するリアリズムの歴史的文脈」『国際政治』第175号、56-69頁。

市川周佑（2022）「佐藤栄作内閣における『大型官房』の成立と展開」『年報政治学』2022－Ⅰ号、284-307頁。

市原麻衣子（2015）「アジア財団を通じた日米特殊関係の形成？――日本の現代中国研究に対する CIA のソフトパワー行使」『名古屋大学法政論集』第260巻、299-318頁。

池内聡・細谷雄一・待鳥聡史（2020）「次世代から見た山崎正和とその世代」『別冊アステイオン　それぞれの山崎正和』CCC メディアハウス、216-223頁。

内田健三・粕谷一希(1987)「対談書評『清沢洌』北岡伸一 国富豊かなれど…」『季刊アステイオン』第5巻、166-178頁。

五百旗頭真（2019a）「五百旗頭真（19）多事の90年代――民間交流から21世紀懇へ　アジアとの『隣交』強化を答申」『日本経済新聞』2019年2月20日、

https://www.nikkei.com/article/DGXKZO41459340Z10C19A2BC8000/（2023年10月24日最終閲覧）。

――――（2019b）「五百旗頭真（20）首相たち――政治改革へ細川氏応援　ODA 巡り橋本氏と対立」『日本経済新聞』2019年2月21日、https://www.nikkei.com/article/DGXKZO41504960Q9A220C1BC8000/（2023 年 10 月24日最終閲覧）。

――――（2019c）「五百旗頭真（17）楠田研究会――大動乱の欧州に派遣　佐藤元首相のブレーンに参加」『日本経済新聞』https://www.nikkei.com/article/DGXKZO41319780V10C19A2BC8000/（2023 年 10 月24日最終閲覧）。

牛尾治朗（2019）「『世界で最も尊敬された日本人』緒方貞子さんの生き方に学ぶこと」『文藝春秋 digital』2019 年 11 月 25 日、https://bungeishunju.com/n/n05b8dd2e550b（2023年10月24日最終閲覧）。

大賀哲（2011）「丸山眞男における『リアリズム』と『現実主義』――規範と現実の多層性」『法政研究』第78巻第3号、59-84頁。

大嶽秀夫（2021）『日本政治研究事始め――大嶽秀夫オーラル・ヒストリー』（酒井大輔・宗前清貞編）ナカニシヤ出版。

大森義夫（2005）『日本のインテリジェンス機関』文藝春秋。

大山貴稔（2024）「『日本の開発学』をめぐる政治的風景――北岡伸一 JICA 理事長による近代化論の復権」東京大学東洋文化研究所編『東洋文化』 第104号、201-224頁。

岡崎久彦（2000）「まえがき」岡崎久彦・佐藤誠三郎『日本の失敗と成功――近代160年の教訓』扶桑社、1-5頁。

――――（2015）『国際情勢判断・半世紀』扶桑社。

小熊英二（2002）『〈民主〉と〈愛国〉――戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。

粕谷一希（1954a）「書簡二つ」『土曜会会報』第2号、1-2頁（国立国会図書館憲政資料室「福留民夫氏旧蔵若泉敬文書」請求番号2）。

――――（1954b）「現役を去るに当つて」『土曜会会報』第5号、4頁（国立国会図書館憲政資料室「福留民夫氏旧蔵若泉敬文書」請求番号3）。

――――（1960）「心のアルバムを――『時代』12号編集に関連して」『土曜会会報』第23号、3-4頁（国立国会図書館憲政資料室「福留民夫氏旧蔵若泉敬文書」請求番号19）。

――――（1999）『中央公論社と私』文藝春秋。

――――（2005）「奇縁――序にかえて」坂本多加雄（杉原志啓編）『坂本多加雄選集Ⅰ 近代日本精神史』藤原書店、1-3頁。
――――（2006）『作家が死ぬと時代が変わる――戦後日本と雑誌ジャーナリズム』日本経済新聞社。
――――（2014）『粕谷一希随想集Ⅲ 編集者として』藤原書店。
片山修（2000）『おもろいやないか――佐治敬三とサントリー文化』集英社。
――――（2021）『山崎正和の遺言』東洋経済新報社。
神谷万丈（2012a）「日本的現実主義者のパワー観」『国際安全保障』第39巻第4号、66-81頁。
――――（2012b）「日本的現実主義者のナショナリズム観」『国際政治』第170号、15-29頁。
加藤博章・板山真弓・大山貴稔・河野康子編（2021）「渡邊昭夫（東京大学名誉教授）オーラルヒストリー」国立国会図書館所蔵。
神谷光信（2023）『村松剛――保守派の昭和精神史』法政大学出版局。
辛島理人（2015）『帝国日本のアジア研究――総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』明石書店。
苅部直・細谷雄一（2022）「苅部直×細谷雄一『学』と『芸』のあいだ――サントリー学芸賞の世界 Vo.1」『Foresight』2022年12月5日、https://www.fsight.jp/articles/-/49359（2023年10月24日最終閲覧）。
岸俊光（2019）『核武装と知識人――内閣調査室でつくられた非核政策』勁草書房。
――――（2023）「『志垣民郎旧蔵 内調資料』解題」https://j-dac.jp/naicho/naicho_kaidai_1.pdf（2023年12月20日最終閲覧）。
北岡伸一（1987）『清沢洌――日米関係への洞察』中央公論社。
――――（2005）「とくに残念に思うこと」藤原書店編『月報1（坂本多加雄選集）』第1巻、1-2頁。
――――（2020）「先生との対話」『別冊アステイオン――それぞれの山崎正和』CCC メディアハウス、171-177頁。
北岡伸一・舛添要一・北里敏明（1992）「はじめに」佐藤誠三郎先生退官記念会編『知は力なり――佐藤誠三郎ゼミの25年』佐藤誠三郎先生退官記念会、ⅰ-ⅲ頁。
楠田實（1989）「調査研究計画書」和田純編『オンライン版 楠田實資料（第二期）』丸善雄松堂、2022年、2L-3-53。
――――（2001）『楠田実日記――佐藤栄作総理首席秘書官の2000日』（和田純・五百旗頭真編）中央公論新社高坂正堯（1963）「現実主義者の平和論」『中央公論』第78巻第1

号、38-49頁。
楠綾子（2014）「冷戦と日米知的交流――下田会議（1967）の一考察」『国際学研究』第3巻第1号、31-44頁。
高坂正堯（1963）「現実主義者の平和論」『中央公論』第78巻第1号、38-49頁。
――――（1965）『海洋国家日本の構想』中央公論社。
小島多恵子（2020）「地域へのまなざし」『別冊アステイオン――それぞれの山崎正和』CCC メディアハウス、261-266頁。
神戸大学大学院法学研究科（2005）『ファカルティレポート5――神戸大学大学院法学研究科・法学部 自己評価報告書』http://www.law.kobe-u.ac.jp/pdf/evaluation/FR/5.pdf（2023年10月24日最終閲覧）。
後藤乾一（2010）『「沖縄格密約」を背負って――若泉敬の生涯』岩波書店。
酒井大輔（2019）「佐藤誠三郎論ノート」第 3 回日米政治学史茶話会報告資料、https://researchmap.jp/dsakai/presentations/11173720/attachment_file.pdf（2023 年10月24日最終閲覧）。
酒井哲哉（1996）「戦後外交論における理想主義と現実主義」『国際問題』第432号、24-38頁。
――――（2006）「国際政治論のなかの丸山眞男――大正平和論と戦後現実主義のあいだ」『思想』第988号、5-25頁。
坂本義和（1965）「『力の均衡』の虚構――ひとつの『現実主義』批判」『世界』第231号、31-49頁。
佐々淳行（2003）『焼け跡の青春・佐々淳行――ぼくの昭和20年代史』文藝春秋。
佐藤信（2021）「現代日本における有識者会議の政治的機能」『法律時報』第93 巻第 12 号（通巻第1170 号）、49-56 頁。
サントリー文化財団（1979）「設立主意」https://www.suntory.co.jp/sfnd/zaidan/prospectus.html（2023年10月24日閲覧）
塩野七生（2015）「ある出版人の死」藤原書店編集部編『名伯楽――粕谷一希の世界』藤原書店、14-17頁。
志垣民郎・岸俊光（2019）『内閣調査室秘録――戦後思想を動かした男』文藝春秋。
鈴木健吾（2023）「ある保守系知識人の自己形成――坂本多加雄『土曜会』原稿よりみる」藝林會編『藝林』第72巻第2号、58-86頁。
竹内洋（2014）「『中央公論』――誌運の法則」竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論

壇雑誌――教養メディアの盛衰』創元社。
田中明彦（2000）「序章 国際政治理論の再構築」『国際政治』第124号、1-10頁。
田中健五（2012）「『グループ1984年』との出会い」グループ1984年『日本の自殺』文藝春秋、162-166頁。
張帆（2020）「戦後日本の現実主義を再考する――日中比較の視点から」『国際政治』第200号、52-66頁。
――――（2021）「冷戦後期の防衛論争と日本的現実主義」『日本研究』第63号、113-130頁。
角田富夫編（2001）『公安調査庁 ㊙文書集――市民団体をも監視する CIA 型情報機関』社会批評社。
土曜会（1959）「土曜会基本綱領（1952年9月）」土曜会編『土曜会設立の経緯とその思想』1-2頁（国立国会図書館憲政資料室「福留民夫氏旧蔵若泉敬文書」請求番号162）。
西尾幹二（2002）「坂本多加雄氏の死（10月30日～11月3日）」『西尾幹二のインターネット日録』https://ssl.nishiokanji.jp/bibliography/tui8.html（2023年10月22日最終閲覧）
根津朝彦（2008）「編集者粕谷一希と『中央公論』――「現実主義」論調の潮流をめぐって」『総研大文化科学研究』第4巻、57-81頁。
――――（2013）『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件――「論壇」・編集者の思想史』日本経済評論社。
服部龍二（2018）『高坂正堯――戦後日本と現実主義』中央公論新社。
半藤一利（2015）「開眼の先達」藤原書店編集部編『名伯楽――粕谷一希の世界』藤原書店、77-79頁。
前田亮介（2022）「合衆国の『危機』と『革命』――1960年代の坂本義和」前田亮介編『戦後日本の学知と想像力――〈政治学を読み破った〉先に』吉田書店、23-59頁。
牧田東一（2013）「帝国の文化的支配装置としての財団――冷戦期日本におけるフォード財団の活動」平野健一郎・古田和子・土田哲夫・川村陶子（編）『国際文化関係史研究』東京大学出版会、476-494頁。
松田武（2015）『対米依存の起源――アメリカのソフト・パワー戦略』岩波書店。
御厨貴（2015）「粕谷さんと僕――永遠の先輩後輩関係」藤原書店編集部編『名伯楽――粕谷一希の世界』藤原書店、50-58頁。
――――（2005）「惜しんで余りある実証について」藤原書店編『月報1（坂本多加雄選集）』第1巻、3-5頁。
――――（2018）『平成風雲録――政治学者の時間旅行』文藝春秋。

御厨貴・阿川尚之・苅部直・牧原出編（2017）『舞台をまわす、舞台がまわる——山崎正和オーラルヒストリー』中央公論新社。

村田晃嗣（2008）「リアリズム——その日本的特徴」日本国際政治学会編『日本の国際政治学——1 学としての国際政治』有斐閣、41-60頁。

村田良平（2008）『村田良平回想録 上巻——戦いに敗れし国に仕えて』ミネルヴァ書房。

春名展生（2020）「『大東亜共栄圏』から『海洋国家』へ——地政学の断絶・継承と高坂正堯」『東京外国語大学国際日本学研究』プレ創刊号、71-82頁。

待鳥聡史（2020）『政治改革再考——変貌を遂げた国家の軌跡』新潮社。

村松岐夫・大嶽秀夫・猪口孝（1987）「発刊趣意」『レヴァイアサン』第1号。

森田吉彦（2011）『評伝 若泉敬——愛国の密使』文藝春秋。

————（2021a）「紳士の決闘——歴史のなかの関・森嶋論争（前編）」『Voice』第517号、159-167頁。

————（2021b）「紳士の決闘——歴史のなかの関・森嶋論争（後編）」『Voice』第519号、160-167頁。

矢崎新二（1959）「はじめに」土曜会編『土曜会設立の経緯とその思想』i-ii 頁（国立国会図書館憲政資料室「福留民夫氏旧蔵若泉敬文書」請求番号162）。

山崎正和（2009）「学芸賞の三十年と歴史的な意味」サントリー文化財団編『サントリー学芸賞選評集』サントリー文化財団、5-12頁。

和田純（2022）「第2期『楠田實資料』——『大国化する日本』の政治的葛藤」『オンライン版 楠田實資料 第2期』丸善雄松堂、https://j-dac.jp/KUSUDA/kusuda2_kaidai.pdf（2023年10月24日最終閲覧）。

Guilhot, Nicolas (2017) *After the Enlightenment: Political Realism and International Relations in the Mid-Twentieth Century*, Cambridge University Press.

五百旗頭真氏インタビュー（於国際文化会館）、2017年6月9日。